



近來和歌雜談

伊地知文庫
文庫20
327



近來和歌新法



一 芝山太翁の吾初春備と一 時よりさるる南村朝道の和歌は
 風系に推遷来る及の風神を先ハ新法推遷集才神を因事
 小々しむ也此系地下の分ありと号する等わあふ時代
 あらざるをさるるひそく惟例をのこ取てしむゆへ南村の風ふる
 くらたふ今も 執撰の集作出さるるゆへて是を撰む人そ
 撰指と云ら一折小時代を分て撰撰と云るゆへて是を撰む人そ
 撰指と云らまを世の撰集と云るゆへて是を撰む人そ
 なるに古人の分るるも南村の風をあひする分る別集撰ひ
 入るるもそむゆへる分るしむゆへ時代遠なるりてそ歌を知
 らずして能くも讀てそさよそ地下の分る字押歌撰よ
 あるよのゆへたとしうゆありとそ

けりしものごとく中々天細を華親にあら居上人の遺徳を了るをせせり

一經天の徳にゆききりてよく書か故実之禁律に律中の法念の戒を
よそ灯火のともを懐くともあること相經丹にすく一た
よそ書きて故に殺紙を切て經丹とく一海一書をきり
取つてきて書かすこと一そのまゝ一の經をわけて書
後世をたつとも書してく教としてとも續と云ふをすててよふ
むつら振ふんを人々今もたよくよめてきんききりて
細きれんきりてよはきりてをぬきり經天の法念の結
あふけり人の經天の法念をの結

けりしものを 我々 此の法念の大方おらけ法儀の道に法を
きりてよ書の故実をばきりてをわきりてをぬきりて
よそ我々うらわふことむつらよふりてをぬきりて

ぬきりてよ書の故実をばきりてをわきりてをぬきりて
ぬきりてよ書の故実をばきりてをわきりてをぬきりて

一形をよそよの今に抱てよすけりてをぬきりてをぬきりて
祝守守りてをぬきりて

けりしものごとく 我々 此の法念の大方おらけ法儀の道に法を
きりてよ書の故実をばきりてをわきりてをぬきりて

一經天の徳にゆききりてよく書か故実之禁律に律中の法念の戒を
よそ灯火のともを懐くともあること相經丹にすく一た
よそ書きて故に殺紙を切て經丹とく一海一書をきり
取つてきて書かすこと一そのまゝ一の經をわけて書
後世をたつとも書してく教としてとも續と云ふをすててよふ
むつら振ふんを人々今もたよくよめてきんききりて
細きれんきりてよはきりてをぬきりて經天の法念の結
あふけり人の經天の法念をの結

一經天の徳にゆききりてよく書か故実之禁律に律中の法念の戒を

てかよめと行かすべし

松風も清れしをまじりてしるすあつとあつと家の古き
法を正し侍するはすてかよめをさうりあひひかれし神は
新拾遺集をとりて詞の九指を新拾遺と名のおよそりてを
よめと名ふはかゝるは

出雲のあつと田のふれ埋めありとてしるす地鳴る

はかまを清くもるふとてしるす地鳴るのふに南時
吐人のかたをたふしてしるす真あつと神のしるすはつ
かよめよりあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
この地はあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

はかま 重元院法皇ふとあつとあつとあつとあつとあつと

一 漢のこの清くはけてしるすあつとあつとあつとあつとあつと

重元院法皇はかた清くあつとあつとあつとあつとあつとあつと
一にしるすもあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
はかまはあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

されはあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
らあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
れはあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

一 秋のまじりてあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

さるや集
字の集
極河院
勅撰也

けがるゑ大徳を秀がぶしとてくれ給ふ物と彦考の物語

一 彦考 彦考の一代の考あつた

よひのまひみぢくすゝあふ友の月入ぬる候ふと云ふ

けみ彦考始はけのうららとてよひ給ひしを 後水尾院御海制

とて彦考のまひと流るるありしと古今集

塩とて入ぬる候のまひとてよひとすゝかゝ思ひしは

初とこれとてよひしとあり

一 基香つといふとあはもむへはくたつてはつてあは

今のおまふとてまふのまふあはりしとてよひとてあは

又あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

一 彦考

一 梅花 喜風 秋風 菊もやとて熱まじけあをてまへ

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

一 彦考 彦考のまひとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

あはりしとてあはのまふとてよひとてあはりしとて

今よふあわら車れ下す道三のく神となすいふか
湯葬れし射下藤せあらの大石の返る必あわりのとも
後水庵院の湯湯葬れの時也 運清基進云々

小車れくくくく下すこれ思ひもくはとせふいひけ
けお結てもき中戸結つるふ実渡云作をいひ者のひふれ
基進云のちか面白くすすいれとも下藤の返ののちうしひ
ふちのくも藤をあら射たしこあわらぬ二束ぬかろ神
は渡らりとの泡つこ出まきと面白くさうけ射し事
その秀ぬく小車のくくはけりすいこくけと
ともく結ふく射か月も射くち秀かぬへくあひの
時の神あくとあよむものたけ神のぬぬかひくひ
そくに基進云く小結云く感心のも也

一馬九大蛇云々景の夜く分をますの上よそけりち実渡云
通存云不及とく事きいま言初夫情をく五くは旅云云
海山の福あすくちあせくと旅の心乃らうまあふせん

けおま景云結ひてそハ影ふあは情云々あ結りて旅は
云影ふああくとして及行旅のくあ結りてく影をこ
くく云云をてあ結ひく在才子とぬ人あく上よと出あせり
なり守をてこの物語云

一東山院の時時前まで俄はるあ合あり中院通存云夏日と云
影を採りぬ結ひく

写すとのんを清く清く言もあしり日影を海あまけりりのや
け一育すく結存の時かち氣押さるるく一乃結りて実渡の香れ
四年まはぬぬかひくくくこれ月の影ふ清くくそのおつりぬ

この小倉山に一そを思ひよせしるかめりてなまはつりぬ

一高村不承流の中にも梅もといふ飯名を人々の書物に
いふ人々にいふ浅きよと訓へ榮らぬと訓を丹波をたふん
と訓を何れもんとにぬるもらぬは飯名をいより起り能く人
のれをいふてハにいのをもよなるもいふまゝにけりし
関白家公
御書にいふ活きよるすこし申するふ梅ハ万葉集にもむらう
笑ふ飯名をいふと古今集才十梅名の初

あれがうちにあらうくもいふぬらふあつらふよ香を匂ひは
是より先の飯名の種がし日本紀古代のあは飯名ふ梅をいふ
くうりよまをせりめハ梅のをもきうてうもむもそれをさ出さ
ねと同一くうへ 万葉集よ馬梅とむ

一近清叔敏下の事歌 家久云

次方めをうりまぬけてふしむ日を雲吹くもまき風をたふ

秋門をまそふさういふ系梅は足車れ刺をけし梅と
足湯とく赤木と木のまをれぬよ雲菊のさくは京の庭
はあわのつこの後ふ梅とそ思用よむとるあつらふとい梅子
ふかせるあつらふとく人かあつらふ実とてさ 新めが 実語と
いふとく梅と

一実語とく廣きつらぬれハ近代七ツのあつらふといふもさつら
はゆきやうのいふと人やと実語との曰通茂との七ツ云
あつらふ人秋のいふつらぬハ神世のまをれ星合のさ
はあつらふを基すれらる梅よ愛之ゆらとの梅いといふ
一庭をいふ歌と

是乃まのうらまをふめりて家形のいれおのちら秋のね

けがら風を安符つ十首詠 終つちん 高尾院法堂其書
感たりは身より安符つ秀分をよむものごと 毎夜作らる
よらり

一 後水尾院清常より同日之世今けがまれと作らるる小船
とらふ影をあらむと終つてけが清常の詠にらる

今まふふの船をよむとて見んは池のふらりて

けが大い道房は秋管結ら船の舟ふらりて船も静せらる
古のまらあまふとひ出てよらるる真実の作らるる人

一 谷原若久の赤枯と云詠よ

杖の色に葉の角ゆめふらら古の月山吹を

けが新指達きほ赤枯の歌よららるるあまら 高尾院法堂

清常報進つれとてまらるるあまらよのこらりとのゆらるる

とて秀分よりあまらあまらむ人はけがらるるまらるる

一中津門院の作らるるまらるるまらるるまらるるまらるる
しらすをよむとて終つてあまらるる

物々の市場なるまらるる男もあまらるるまらるるまらるる
清入真進つれとてまらるるまらるるまらるるまらるる

小各別のあまらるるまらるる

一回つあふまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

一 あまらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる
まらるるまらるるまらるるまらるるまらるるまらるる

け歌言はよむらん骨をねらひたすらんたよむらん歌言
のち初は骨をねらひ後あけて後あせらんれんのひまも物
ゆりちりかひりるらん一与と歌言の二与とのあいらひま
くともむへそわぬをよむの初は也とある時より名を
あまのらつははをよむらんとの歌の

一 万葉時代花と讀するは梅と古今集は後花と讀出すは梅と夜
土も昔は桃とのこ美花と書くはれをそと結語も桃の天
々くるともそ梅と云ふは証と云ふを考へて遠末よりと海
棠牡丹を押しして花とせしむらん於らわ和漢オム目
りともへたり時代よりその遠いあれを今を記し古を新
くく古歌記し今を新記しつて契沖も名を考へ考られ
とも万葉を記してはつと後の名を新記しつてはつと

思ふ

一 中陽門院侍在位の時歌の文より山吹をよむるは

吉井川梅はちりて約めればはふかりとらんさるらんあ
実澄の初有感とてのり清かんにゆたらんとも美よめく梅と教
てよまの由とのよなりて音のふ神をそ詞をそつとまの由
くやふまも梅に替れて歌をそつとらん山吹の功を
いら梅のよハ山吹をらんよめれ御詞なるらんぞれとも真
く梅のよハ

一 古今集に能治神と云ふものち句論のそつとらんを口を
てなるとのち能治神と云ふかつともといひつとて西宮辨れ詞
つよなるを能治神と云ふらん安を以て古今より傳文を
る能治神と云ふ能治神と云ふらん傳文と云ふ及らん

一今の風お友実積つておののよはん息保りもれい必家道の
なりて人ともあつておれおとすものハ風おつておの
まれも絶よいころのいそもつていそもつてお時まもつてい
言上痛すそ風お友つくりおのり時田舎より送りてい
お標よ云浴湯をせお友おとす今もあつておのりひていお時
山友

おやうおをいひちいそつていそつていそつていそつていそ
お標おれお古風つて古今集よまよつていそつていそつてい
おらおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

いそつていそつていそつていそつていそつていそつていそ
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり

と基香つての巻

宝曆十三年の秋はより日神お友おとす我里内舎おれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
いそつていそつていそつていそつていそつていそつていそ
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり

おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり

一証お天椒おおとつていそつていそつていそつていそつてい
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり
おのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのりおのり

て是を東山といふは息する時一晩の飛ぶかと思はれ小鳥
の鳴き声はさういふかゝる音を鳴らしはせよと云ふなりと通教
云のいふことなり

一其は山守まのりのおふ花は地風

風はあふるふ散物さうなるを花はさうなると云ふ飛ぶひきん
けきよまのりまのりともちうようまのりの中は地風地下の音と
いふはけきまのりなりと云ひはひきんはさうなると云ふなり
のいふことなり

一其は山守まのりのおふ花は地風
切かゝるを東山といふは散物さうなるを花はさうなると云ふ
ひきんはさうなると云ふなりと云ひはひきんはさうなると云ふ
なりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなり

は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
久松中の清月次

は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり

は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり

は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり
は使来たるを宗とれむ此の後のはけきまのりなりと云ふなりと云ふなり

打てかゝるはくはむとのし津指はゆるりとはさくららつせむの
の義にそは指指れ如常よんをむるの度上人の儀あり
生翁の考も忘る日ぬららつ指の面白く指津指の指
れらのし指指れよものしをれへんて近くたるとは指指れ
然る曲物入大さあものしをれはよりそは津指の具をりて
まうものめれそは毎津指のし行をむるの度上人の間の次
なる其指指れよ多くとまのしは津指のしをれはよりそは津指の具をり
とのしをれはよりそは津指のしをれはよりそは津指の具をり
てはよりそは津指のしをれはよりそは津指の具をり
よりあはるへんは津指のしをれはよりそは津指の具をり
あがり

かまよの考指のしをれはよりそは津指の具をり

かまよの大指者のしをれはよりそは津指の具をり
思ふもの古あはれはよりそは津指の具をり
る指多しまはよりそは津指の具をり

義望曰

職指抄大指者のしをれはよりそは津指の具をり

之指成切下文今支配于國々此省調庸のしをれはよりそは津指の具をり
切下文や成る諸のしをれはよりそは津指の具をり
今指切下文とそものしをれはよりそは津指の具をり
ゆゑ考指のしをれはよりそは津指の具をり

一入門の折必のしをれはよりそは津指の具をり
一和音れ集ふものしをれはよりそは津指の具をり
昔今津指 神仏の考 勅勅人考 指れ五歌 實よ名の
とれはよりそは津指の具をり

集も又も亦洋流の事のものせよと云はざる

一源市之家の集也

白波のうらまは川をせより後年より毎島なりきり
此新田の川より後年山陽河之原町古今我抄より山陽川と云田
川よりしりめりしより物事なれば例也實にこれ作りの例
五世交てよむいへんはたきも教誨云々
一宗家つ或子内親まふ糸うのい中給くつしかなるは送られな
る可

ながしともあつともあらんるりる思言書綴の事れ白書
父後成つまをいはる世の悟と云はしはよつといふあはれはけを
傳へんと今と止るうへに沖もさしよゆもさつとんもんえり
とのほひさるらんゆくはあ教のいふ世のうへもも願ぬ

海も情のんいりるもりるうらむるねはのい各あたるもの
やけ舟は海も情もいりるもりるうらむるねはのい各あたるもの
いたすよまもりるいりる 聖元院のうらむるねはのい各あたるもの
是よりうらむるあらんるいりるねはのい各あたるもの
いりるもりるうらむるねはのい各あたるもの

一拾遺集集也乃也

みづよりけりるもりるうらむるねはのい各あたるもの
實にこれ作りの文字傳りの舟もんをいりるもりるうらむるねはのい
なりよまもりるあり物事なれば例也實にこれ作りの例
るうねのあらんるいりるねはのい各あたるもの
いりるもりるうらむるねはのい各あたるもの

一あいらしき船波をうけてんもりるねはのい各あたるもの

け舟 壬二集より出く 青海雜 家隆の号也

一 此種離別の形ふみちのちあはれはうりまゝの今に前てふて舟
注ぐもく送りまゝ

別出のちのち舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
其のちのち舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
らあてのち舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
地平緒執柄を補其のちのち舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
てつづのち舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
是れ舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
の舟なるゆけとまゝのんをせりてたて

一千五百書行合有家の舟也

朝の船なるゆけとまゝのんをせりてたて

船のちのち舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
となるゆけとまゝのんをせりてたて
書りてたて

一 舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
舟なるゆけとまゝのんをせりてたて

一 舟なるゆけとまゝのんをせりてたて

舟なるゆけとまゝのんをせりてたて

返す

上村相伝

舟なるゆけとまゝのんをせりてたて
舟なるゆけとまゝのんをせりてたて

とひききえられともぞれあひつゝもまゝあはれり
況や也
一契の方をよむゆゑあはれりつゝもまゝあはれり
まんとしたるゆゑあはれりつゝもまゝあはれり
実徳云の語のゆゑあはれりつゝもまゝあはれり
る實はあはれりつゝもまゝあはれり

ひの四友はとてあはれりつゝもまゝあはれり
んるよはれりつゝもまゝあはれりつゝもまゝあはれり
あはれりつゝもまゝあはれりつゝもまゝあはれり
ともあはれりつゝもまゝあはれりつゝもまゝあはれり
連はあはれりつゝもまゝあはれりつゝもまゝあはれり
つゝもまゝあはれりつゝもまゝあはれりつゝもまゝあはれり
ものあはれり

寶曆十二の夏

源我堅



